

「世界をめぐる楽器」 福岡正太（国立民族学博物館准教授）

(1) インドの楽器と分類 2019 年 4 月 6 日刊行

楽器の分類法として、管・弦・打楽器の 3 分類法がよく知られている。これはオーケストラなどに使われる楽器の歴史や音楽的役割を踏まえた分類として便利だ。しかし、これで世界の楽器を分類しようとすると不都合が生じる。たとえば、弦を打って鳴らす楽器は弦楽器にも打楽器にも分類できる。

これに対して、楽器研究でよく使われるのが、体鳴・膜鳴・弦鳴・気鳴楽器の 4 分類法だ。音を発する媒体に着目した分類で、それぞれ、固体（楽器自体）、膜、弦、管の中の気柱が振動して音を出す楽器を指す。後に、電氣的に音を発生させる電鳴楽器が加えられた。

1876 年、インドの音楽学者 S・M・タゴールは約 100 点のインドの楽器と音楽書をブリュッセルの楽器博物館に寄贈した。それがこの 4 分類法考案につながり、ヨーロッパにおける楽器研究を大きく進展させた。

彼は日本にも 3 点の楽器を寄贈し、それらは現在東京国立博物館に所蔵されている。また、同じタゴール家の血筋で、日本でインド文化の普及に尽くしてきたサンディップ・タゴール氏が所蔵していた楽器が、3 年前国立民族学博物館に譲られた。それらの貴重な楽器の一部が、5 月 7 日まで国立民族学博物館で展示されている。



サンディップ・タゴール氏の祖父が愛用していたシタール＝国立民族学博物館所蔵

(2) 木琴の起源 2019 年 4 月 13 日刊行

木琴というとオーケストラなどで使われるマリンバを思い浮かべる人が多いのではないだろうか。ピアノの鍵盤と同様に音板が並び、それぞれの音板の下には金属の筒状の共鳴器がとりつけられている。マリンバは、1910 年にアメリカ合衆国で製造が始まり、ポピュラー音楽のバンドで使われるようになって、世界で広く知られるようになった。オーケストラの中で確固たる地位を占めるのは、40 年代以降のことである。

現在一般的に普及しているマリンバのモデルとなったのは、ラテン・アメリカのマリンバである。とくにグアテマラでは、1821 年の独立以来、国民的楽器として愛されてきた。そして、ラテン・アメリカのマリンバの源をたどるとアフリカに行きつく。「マリンバ」という名称も、アフリカの言葉に由来すると考えられている。

さらに、アフリカの木琴は東南アジアに由来するという説がある。東南アジアで現在よく見られるのは、舟形の共鳴胴の上に音板を並べた木琴で、マリンバとは少し異なるタイプだ。歌舞伎などに用いられる日本の木琴も、よく似た形をしている。この説に反対する研究者もいて、真偽のほどは確かではないが、木琴のたどった道が世界中に及んでいるのはまちがいない。

彼は日本にも 3 点の楽器を寄贈し、それらは現在東京国立博物館に所蔵されている。また、同じタゴール家の血筋で、日本でインド文化の普及に尽くしてきたサンディップ・タゴール氏が所蔵していた楽器が、3 年前国立民族学博物館に譲られた。それらの貴重な楽器の一部が、5 月 7 日まで国立民族学博物館で展示されている。



西ジャワの木琴ガンバン＝インドネシア・バンドンで 1995 年、筆者撮影

インドネシア・ジャワ島中部の仏教遺跡ボロブドゥールのレリーフには、さまざまな楽器が描かれている。研究者が棒ツィターと呼びならわす楽器もその一つだ。棒状の胴に 1 本の弦を張った楽器で、半分に割ったヒョウタンなどを共鳴器として取り付け、それを演奏者の体に押し付けたり離したりすることで音に変化をつける。

ボロブドゥールは、インド文明の影響の下、8~9 世紀にかけて建立された。そこに描かれた楽器もインドからもたらされたものと考えられている。インドでは、棒ツィターはビーンあるいはルドラ・ヴィーナーとよばれる楽器に発展していった。それは、より大型で複雑な弦楽器で、北インド古典音楽に用いられる。中空の筒状の胴（指板）に 4 本の旋律弦と 3 本の共鳴弦を張り、胴の両端にヒョウタンの共鳴器がつけられている。琴の仲間に分類される楽器だ。

残念ながら、現在のジャワ島では棒ツィターをみることはできないが、東南アジアの大陸部では今でも棒ツィターが奏でられている。タイのピン・ナムタオやカンボジアのセ・ディウとよばれる楽器である。これらの楽器の歴史ははっきりとはわからないが、インドから東南アジアにもたらされ、1000 年を超えて演奏されてきたと想像される。



棒ツィター（カニ）の伴奏で歌うラオスの少数民族オイの女性（手前左）＝ラオス・アタプーで 2013 年、筆者撮影

(4) 名前の一人旅 2019 年 4 月 27 日刊行

東南アジアには、「カチャピ」やそれに似た名前をもつ弦楽器が多い。「カチャピ」は、サンスクリット語の「亀」あるいはセンダン科の木の名前に由来すると言われる。ジャワ島の仏教遺跡ボロブドゥールの浮彫に描かれている舟形あるいはびわ形の胴の弦楽器とともに東南アジアに伝えられたと考えられている。

その名前は少しずつ形を変えながら広まった。インドネシアのクチャピ、クルチャピ、カチャピン、ハサピ、フィリピンのクティヤピ、タイのクラチャッピーなどが知られている。さらに頭の 1 音が落ちたカンボジアのチャペイ、マレーシアのサペなどもある。

これらの楽器は、リュートやギターの仲間が多いという共通点をもつが、胴の形、棹の長さ、フレットの有無や形、弦の数などさまざまで、必ずしも同系統の楽器とはみなせない。西ジャワのカチャピのように琴の仲間の楽器もある。20 世紀前半に日本で考案され、アジア各地に広まった大正琴も、西スマトラではクチャピと呼ばれている。

楽器は、ある場所から別の場所へと伝わり、そこでまた変化を遂げながら伝えられてきた。ところが、楽器の広がりとその名前の広がりとは必ずしも一致しない。それは世界の楽器を知るための悩みの種でもあり、楽しみでもある。



バクバク・バタック人が演奏しているクルチャピ＝インドネシア・北スマトラのダイリで 2005 年、筆者撮影